

フランツ・ブレンデルの「新ドイツ派」とその概念の変遷

上山 典子

1859年、フランツ・ブレンデルによって提唱された「新ドイツ派」は非常に錯綜した概念である。その表現は「並外れて複雑」(Gut 1986)で、「[この派]に関する学問的考察は、今日に至ってもなお、音楽学の火急の課題に数えられている」(Altenburg 2006a)。基本的な概念規定さえ不可能な状況下、「新ドイツ派」が音楽史におけるどの巨匠を、いずれの作曲家を意味しているのか、決して明確にされていない。「新ドイツ派」とは何か。この名称が指し示すのは誰か。本稿はこの用語としての曖昧さを解明するために、「新ドイツ派」がブレンデルの提唱からわずか数年の間に意味上の変遷を経験していたという事実に注目する。

1850年代の音楽論争でキーワードとして用いられていた術語「未来音楽」の代わりに、ブレンデルは当初「新ドイツ派」という表現によって、ベルリオーズ、リスト、ヴァーグナーの「三人組」を念頭に置いていた。しかし1860年代早々、「三人組」派はヴァーグナー＝リスト派となり、またそれほど時を経ずして今度はリスト派へと変化した。そしてリストと彼の仲間たちによるこの新しい集団はやがて、1861年8月に設立された「全ドイツ音楽協会」とほぼ同一視されていくことになる。それはビューロー、コルネーリウス、ブロンザルト、リッター、ポール、タウジヒ、ダムロシュ、プルックナー、そしてブレンデル自身など、リストのヴァイマル時代(1848-61年)の弟子や支持者たちの尽力によって成立した公的機関で、彼らの理念推進のための共通の基盤として大きな役割を果たしていった。リストと彼の仲間たちという新しいメンバーのもとで、「新ドイツ派」概念はヨーロッパ中で同時代音楽の普及と促進に奔走する進歩的音楽家の大集団、という新しい意味合いを持つようになったのである。